

Rathke's cleft cyst recurrence after transsphenoidal surgery: a meta-analysis of 1151 cases

Mendelson ZS, Husain Q, Elmoursi S, Svider PF, Eloy JA, Liu JK

J Clin Neurosci 21 : 378-385, 2014

本論文は、経蝶形骨洞手術にて治療を行ったラトケ嚢胞のアウトカムについて、過去の文献をレビューした論文である。対象は1990～2012年までのMedline/PubMedの英語論文で、28報告1,151例の患者について検討した。男女比は1:2.2で、症状、嚢胞部位、治療法、アウトカムなどの各項目について検討した。症状としては頭痛(55%)、内分泌異常(46%)、視野欠損(34%)が多くみられた。52%が鞍内から鞍上部、42%が鞍内のみ、6%が鞍上部のみであった。451例(39%)はmicrosurgical transsphenoidal ap-

proachで手術され、再発が平均14%、術後の内分泌機能低下が25%であった。一方、96例(8%)はendonasal endoscopic transsphenoidal approachで手術されており、再発が平均8%、術後の内分泌機能低下が10%であった。手術による全摘出が33%、部分摘出が35%、生検およびドレナージが32%で、術後は平均38カ月フォローされていた。再発率は全摘出19%、部分摘出9%、そして生検およびドレナージ6%で、再発率は全摘出で有意に高い結果であった($p<0.05$)。対象の全再発率は12.5%であった。

【コメント】 本研究は、症候性のラトケ嚢胞に対する治療についてのレビューである。ラトケ嚢胞の発生や増大には不明な点が多く、術後の再発にも多数の因子が関与すると考えられる。治療については、近年の内視鏡技術の進歩により、再発率および術後の内分泌機能において治療成績が向上していると報告されている。より積極的に全摘出を目指す報告もみられ、再発率が低いことが期待されるが、本研究では全摘出で再発率が高い結果となっている。しかし研究デザインにバイアスも多く、十分な結論は得られていない。

Overweight, obesity and meningioma risk: a meta-analysis

Shao C, Bai LP, Qi ZY, Hui GZ, Wang Z

PLoS ONE 9 : e90167, 2014
doi : 10.1371/journal.pone.0090167

体重過多と髄膜腫発生のリスクの関連を過去の報告から検討した論文である。PubMedおよびEMBASEデータベースで、過去のコホートおよびケースコントロール研究をレビューし、2006～2013年の英語論文で検討した。体重過多をoverweight群($25 \leq \text{BMI} < 30 \text{ kg/m}^2$)とobesity群($\text{BMI} \geq 30 \text{ kg/m}^2$)に分けて検討している。結果は、髄膜腫発生リスクとoverweight群の相関はrelative risk (RR) 1.12 (95%CI : 0.98-1.28) でみられなかったが、obesity群ではRR1.45 (95%CI : 1.26-1.67) で有意な相関がみられた。

Obesity群のサブ解析では、男性では統計学的関連はみられなかったが、女性のobesity群はRR1.46で髄膜腫発生と有意な関連があった。また研究地域別にobesity群をサブ解析したところ、北米の研究でRR1.47 (95%CI : 1.21-1.78)、欧州の研究でRR1.43 (95%CI : 1.16-1.77) と髄膜腫発生と有意に相関していた。一方で、overweight群では性別、地域やstudyデザインでも髄膜腫発生と統計学的関連はみられなかった。

【コメント】 本研究はobesityと髄膜腫発生が有意に相関していることを示した。近年、肥満はインスリン抵抗性と高インスリン血症を引き起こすため、insulin-like growth factor (IGF) と関連して腫瘍を誘発する可能性が報告されている。髄膜腫にはIGF1, IGF2, IGF1Rが高発現しているとの報告もあり、それが髄膜腫発生に関与しているのかもしれない。髄膜腫発生における性差は、性ホルモンとの関連も報告されており、肥満を引き起こすホルモン異常と髄膜腫の関連について考えさせられ興味深い。

(光原崇文 京都大学脳神経外科)